

現代児童文学作家対談

10

インタビュー

神宮輝夫

奥田継夫 砂田弘 鶴見正夫



奥田継夫
砂田弘
鶴見正夫

現代児童文学作家対談

10

インタビュー

神宮輝夫



神宮輝夫

一九三二年生まれ。英米児童文学を広く紹介、翻訳・評論に活躍している。
『アーサー・ランサム全集』『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』ほか、
J・R・タウンゼンドの作品など多くの訳書がある。

現代児童文学作家対談

10

発行 一九九二年十二月 初版二刷

著者 神宮輝夫

発行者 今村正樹

発行所 株式会社偕成社

〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町三―五
振替・東京五―一三五二番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製本 株式会社難波製本

N.D.C'909 385P 19cm ISBN4-03-020100-8

Published by KAISEISHA, Ichigaya Tokyo 162. Printed in Japan.

©Terno Jingu 1992

★偕成社は、平日も休日も24時間、電話でもFAXでも本のご注文をお受けしています。
どうぞご利用ください。電話(〇三)三三六〇三三三二(代)FAX(〇三)三三六七〇一二四

●本書の一部または全部を無断で転載したり複写複製(コピー)することは、著作権者および
出版社の権利の侵害になることもありますので、あらかじめ小社あて許諾をお求めください。

対談のはじまり

神宮輝夫

◆

私が、日本の児童文学作家たちから、作品や子どもの文学全般について話がききたいと考えた直接のきっかけは、イギリスやアメリカの作家・作品論の本を翻訳しはじめたことでした。翻訳しているうちに、現代のすぐれた作品すら、すでに子どもの前から姿を消しているという事実に気づいたのです。おなじ現象が日本の作家たちの作品についてもおこっています。しかし、よい作品は、不断にその存在を知らせつづけなくてはならないと、私は考えています。この対談もその一つの試みです。

第二次世界大戦後、新しい子どもの文学作品が年を追うごとに数多く世に出ましたが、作家・作品研究はまだ少ないと思います。この分野でもイギリスは日本よりすこし進んでいて、読書欲を強くそそる作家論がいくつかあります。子どもと大人共通の財産でもあるすぐれた児童文学作品の魅力を伝えてくれる研究がつつぎ生まれたいものです。対談も、そうした研究にさまざまなヒ

ントを提供できる方法ではないかと思いました。

もっとも、対談者としては、私はもっとも不向きな人間かも知れません。ほとんどの作家と、作品を通じて以外おつきあいがいいからです。そして、対談法もとくに勉強したことがあります。そこで、私は、話題を作品に限ること、自分が読んで受けとったものをもとにして話をきくこと、引例なども自分の守備範囲にかぎることを自分の方法としました。目的は、対談する作家の作品世界の魅力を出来るだけ浮き彫りにすることですが、素朴な方法のために、豊かな鉱脈をそのまま残している場合も多いと思います。しかし、幸いなことに、今までに話しあったほとんどの作家たちは、私のいうことを承服できなくても、すぐに反論したりせず、一度かんがえてから答えてくれました。自作を客観的に見るゆとりのある人たちばかりだったので、無用な議論になったり、対話の流れがとぎれてしまったりしませんでした。そのぶんだけは、豊かなものがあると思っています。

現代児童文学作家対談

10

■

目次

「対談のはじまり……」神宮輝夫



奥田継夫

子ども時代の体験がぼくの原石です

93 注

104 奥田継夫年譜

130 奥田継夫著作目録

141 奥田継夫研究文献目録

砂田弘

子どもは通俗という橋を渡る

229 注

241 砂田 弘年譜

250 砂田 弘著作目録

260 砂田 弘研究文献目録

269

鶴見正夫

いい歌は人間の根っこにつながっています

340 注

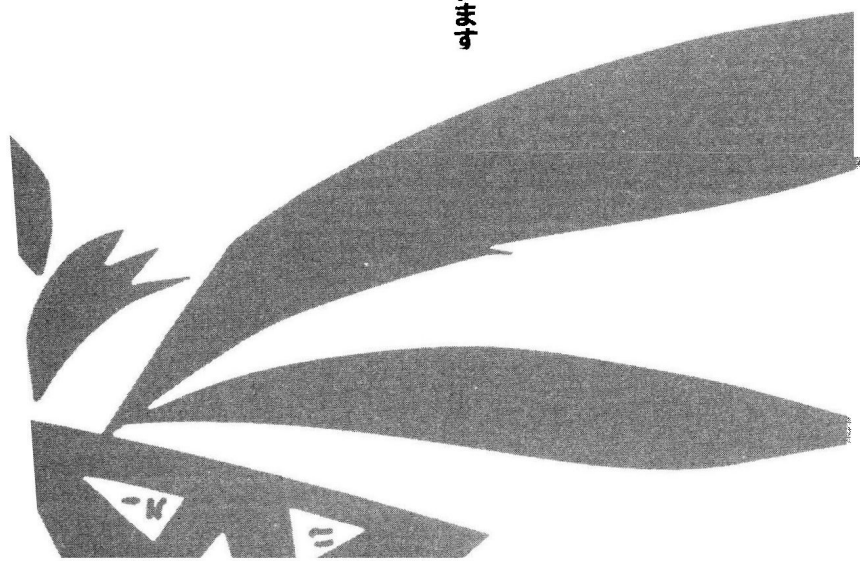
351 鶴見正夫年譜

363 鶴見正夫著作目録

378 鶴見正夫研究文献目録

■

384 対談を終えて……神宮輝夫



装画◆渡辺則子

造本、図書設計◆工藤強勝

編集協力◆恒人社

現代児童文学作家対談

10

インタビュー 神宮輝夫

■
奥田継夫
砂田弘
鶴見正夫





奥田継夫

子ども時代の体験がぼくの原石です

写真 8 頁◆奥田継夫氏。1991.11.26（撮影・西村燎子）

写真 36～37 頁◆白宮の酒亭「みーる」にて構想にふける。1991.11.26（撮影・西村燎子）

写真 66～67 頁◆長男と東南アジア紀行。スマトラにて。1986.8（撮影・奥田心耳）



作家としての出発

神宮——奥田さんの児童文学のそもそものはじまりは「こだま児童文学会」⁽¹⁾ですか？

奥田——そのまえに「児童文学論」というのを書きまして、それがぼくの卒論でした。

神宮——同志社大学のこと？

奥田——それまでぼくは『アリス』⁽²⁾も『星の王子さま』⁽³⁾も日本の創作児童文学も読んだことがなかった。子どもの本というと、子どものときに読んだ講談社の絵本と江戸川乱歩⁽⁴⁾の二十面相、吉屋信子⁽⁵⁾の少女小説のたぐいと、『二房のぶどう』⁽⁶⁾のたぐい。あの当時の読書少年のだれもが通ったパターンですね。あとは手塚治虫⁽⁷⁾のマンガと漱石⁽⁸⁾が同居していました。

神宮——卒論を児童文学にしたきっかけはどういうことだったんですか？

奥田——大学生のとき、『ボクちゃんの戦場』(一九六九年、理論社)を書いてまして。

神宮——あれは「こだま」に連載したのではなくて、大学生のときに書いてたんですか。

奥田——ぼくは大学を三十歳で卒業しましたから、その間に『ボクちゃんの戦場』を書

いて、子どもの本に関係ができてしまったわけです。そのときは児童文学とは思っていなかった。「朝日新聞」の一千万円の懸賞募集のつもりで一千枚くらい書いたんです。同時に学校へ行ってきましたでしょう。自分で実作を書きながら、文学理論がたらないということがわかった。その間に鶴見俊輔⁽⁹⁾先生を通して「こだま」を知り、古今東西、創作古典のいわゆる児童文学、世界と日本の児童文学をめっちゃ読んだんです。そして安永武人⁽¹⁰⁾先生のゼミで自分なりに文学理論をつくったというのがこの世界にはいるきっかけなんじゃないかと思えます。そのころの十年間に書いた短編小説、大人の小説は行李^(こゝろ)に一杯くらいあります。

神宮——それは自学自習みたいにして？

奥田——そうですね。

神宮——集団に属するとかではなしに、自分の読書体験や自分の体験を踏まえて作品を書いてたわけですね。

奥田——書きたいことがいっぱいあって……。

神宮——『ボクちゃんの戦場』もそういう創作活動の一貫であって、子どもの本とかいう意識はなかった？

奥田——ええ。「こだま」と「児童文学論」をやらなかったら、子どもの本に道が開けていなかったでしょうね。考えてみたら大人の本も子どもの本も根っこはいっしょですから、世の中へは児童文学からそれまでは大人の文学でスタートしたことになります。神宮——年齢的にいうと、奥田さんは私とふたつ違いでしょう。『ボクちゃんの間場』が一九六九年の出版ですね。一九六九年は、今西祐行⁽¹¹⁾さんの『浦上の旅人たち』とか、前川康男⁽¹²⁾さんの『魔神の海』の年ですね。私たちの何年か先輩になる人たちが戦後の児童文学の一種の集大成みたいなかたちの作品を出しはじめた時期でした。それよりも少し若い古田足日⁽¹³⁾や山中恒⁽¹⁴⁾も本を書いてたし、私なども評論めいたものを書いたりしていたから、つまり出版年から見ると、奥田さんの出版は戦後第二期みたいななるわけですね。

大学に入って卒業なさるのが遅れたというのは、『いやしんぼ』（一九八二年、理論社）のような作品に書いてあるような体験ですか？　これは、中学を出て板前修業をはじめた若者の仕事と青春を描いた小説でしたが。

奥田——いや、三年浪人して、京都大学、東京外語大学、大阪外語大学、大阪大学、慶応大学、早稲田大学を受けて、みんなすべって、それで自分の好きな大学に入れない

ことが自分でわかって、これ以上の浪人生活に辛抱しんぼうできなくなって、だれでも入れる京都外国語大学に入ったんですよ。それを二年でいいのに三年行って、三年目に『いやしんぼ』の体験をするわけですね。母の実家に二年ほど勤めたんです。そのあとで同志社大学の三年生に編入しました。そしてまた、二年でいいところを三年行って、大学六年と、母の実家に勤めたのが二年と、八年ですね。そして浪人が三年ですから、約十年遅れたわけです。その十年間に『ボクちゃんの戦場』を書いてたんですけど、一九六九年に出たでしょ。その五年まえに原稿がすでに理論社に入っていました。さらにそのまえの五年でぼくは書いてるわけですから、さっきおっしゃった第一期の人たちの集大成を、ぼくはやきもきして聞いてたわけですね。ぼくのがもう入ってるやないかと思ひながら。その五年間に『ボクちゃんの戦場』に続く作品を書いてました。だから、児童文学ということで、ひとつの出版ルートができてしまったから、そっちのほうに……。『続いていた青い空』（一九七六年、PHP研究所）、『夏時間』（一九七六年、偕成社）、『日付のないラブレター』（一九七四年、理論社）。

神宮——つまり『ボクちゃんの戦場』には、「こだま」の影響はない。

奥田——多分。